

東アジア日本研究者協議会 への呼びかけ

朴 喆 熙 (Park Cheol Hee)
ソウル大学日本研究所長

日本研究の流れ : 欧米と東アジアの比較

欧米中心の日本研究：国際比較

- ▶ 日本の再発見と見直し：好奇心
 - 近代化と古い日本に対する憧れ：武士道など
 - アジアの唯一の成功例としての日本
 - ☞ **他者 (Others)**としての日本
- ▶ 成功と失敗の秘密探し：実用主義
 - 日本人論、日本文化論
 - 日本的Governanceや政策、体制
 - ☞ **日本の特質 (Uniqueness)**

Global観点から見た日本研究の現状

- ▶ **国際比較の観点の低下**: 日本 の 話題性 の 弱 化
 - 日本研究者が島のようになっている
 - League of Theirs
 - 日本研究における社会科学論争の低迷
 - Hard Powerは中国を中心に。
 - 日本を対象にした論争の貧困: 高齢化、少子化時代の社会福祉
- ▶ **日本 の Soft Power** に関する興味 の 増加
 - 非政治的、非経済的分野の流行りと文化への復帰
 - 漫画、アニメ、小説、ドラマへの関心
 - 環境、エネルギー、技術

日本を見る東アジア的観点

▶ 東アジアの中の日本

- 東アジアの国々の相互関係
- 地域主義と日本
 - 葛藤と協力
- 域内比較の新しい可能性
 - 日本と韓国、日本と中国の比較

▶ 人文学の復興を通じた日本研究の復活

- 日本文化、歴史、伝統の再解釈
 - 生活先進国としての日本
- 人文学と社会科学の連携
 - 国家としての日本の歴史、哲学
 - 市民の多様性

研究者Communityの違い : 欧米と東アジア

東アジアの日本研究の立場の違い

▶ 自己の中の他者

- 隣の近い国、似ている国、
- 歴史の経験として残っている国

☞ 日本史、日本の思想、日本の対外政策への関心

▶ 成功のModelか反面教師

- 経済発展段階の差を反映し、日本から学ぶ
- 実用的に日本を理解するための日本研究

☞ 日本語、日本文学など人文学の先行

日本研究状況の違い: 東アジアと欧米

- ▶ **数の多い**東アジアの日本研究者
 - Minorityの意識のない日本研究者
 - 学会の分裂と分化: 韓国に30個の日本関連学会
- ▶ 集団論争中心よりは**個別研究**の流行
 - 日本語の堪能な研究者が多いので日本と直接つながる
 - 争点の点検よりは実証研究
- ▶ 消えない**Nationalism**と国境の壁
 - 歴史認識の違いの円満ではない国家間関係
 - 敵対的意識の残存

研究者数の力と弱み

- ▶ **自国市場中心**の競争
 - 海外と繋がらなくても生き残る：内輪の競争
 - ☞ 外に発信しなくても職場はある
- ▶ **実用的、実践的研究**が多い
 - 政府、公共団体、何よりも企業の需要
 - ☞ 日本系企業や大手企業の日本関連の需要は減る
- ▶ **人文学と社会科学の断絶**
 - お互い軽視しながら不思議な尊重と共存
 - 浅い・現実を知らない
 - ☞ 地域学としての新しい出発

三つの融合の必要性

- ▶ **歴史と現在の融合**
 - 戦前と戦後
 - 戦後社会とポスト戦後社会
- ▶ **人文学と社会科学の融合**
 - 談論と実証研究：視角や理論と現実
 - マクロとミクロ
- ▶ **欧米の観点と東アジアの観点の融合**
 - 比較社会や比較地域
 - 新鮮さと慣れているもの

東アジア日本研究者協議会 構成の実践戦略

IJSの議論の紹介(14. 11. 18.)

なぜ日本研究者協議会は必要か

- ▶ 自己・自国中心主義からの脱皮
 - 日本の優越感の均衡化
 - 中国と韓国の歪んでいる理解の修正
 - 東アジア的観点の開発
- ▶ 日本研究者を中心とした葛藤の解消
 - 歴史問題の総合的、多面的理解
 - 戦後日本の姿に関する客観的理解
 - 自己相対化を通じた和解の模索

東アジア日本研究者協議会構成の原則

- ▶ 研究成果を国際的に発信する＝“国際性”
 - 東アジアの高い質の日本研究を世界に紹介する
 - ・ 自国に閉じられた研究からの脱皮
 - 国境を越えてお互いに学びあう
 - ・ 相手に対する尊重を育てる
- ▶ 共同の研究の道をさらに開く＝“公共性”
 - 体系的共同研究と次世代の育成
 - 東アジア的観点の模索
- ▶ 学際的交流の深化で日本学を振興する＝“融合性”
 - 低下する日本への関心を共に引き起こす
 - 複眼的視座の研究と課題の開発

どうすれば東アジア日本研究者の 国際組織を作られるか

- ▶ **二段階方式**で形成する: 年1回の研究発表博覧会
 - 機関から始まり個人へ
 - Consortiumから始まり学会へ
 - 賛同者から始まり皆へ

☞ 参加機関がそれぞれPanelを構成する
- ▶ **4種類のPanel**の組み立て
 - 全体企画Panel: 運営委員会の承認
 - 機関企画Panel: 参加機関の呼びかけ
 - 自由参加Panel: 個人の応募
 - 次世代Panel: 大学院生

☞ 参加者の幅と深さを広げる

協議会運営の実践戦略

- ▶ **循環型の主催**：国と都市を毎年回る
 - 責任主催機関を指定する
 - 3－4日の日程に観光や視察を含む
 - 事務局は持ちまわす：固定の組織に置かない
- ▶ **多元的言語と共通言語の設定**
 - 日本語を基本とする
 - 英語のPanelを持つ
 - 開催国の言語も入れる
- ▶ **多機能的会合**：機関の情報交換及び人的交流
 - 機関の紹介のBooth設置
 - 懇談会の開催
 - 出版物の紹介や販売

第1回目の会合の呼びかけ

2016年韓国松島(ソンド)開催の提言

- ▶ **2016年12月始めの開催を目指す**
 - 準備期間を含んで1年以上の準備が必要。
 - 2015年11月まで参加機関の了解を得る
 - 2015年10月までCore機関の参加を確保する

- ▶ **仁川空港から近いConvention Centerで**
 - 200人以上の参加者が同時に複数のPanelを開ける
 - Hotelなどの整備ができている
 - 空港から近いのでどの国からも接近しやすい

組織の具体化のための提言

- ▶ **準備委員会**の設立: 2016年10月まで
 - 呼びかけ人の発足: Coreの組織Member
 - 日本、韓国、中国、Taiwanを含んで20人以下
 - 企画・運営委員会
 - 各国の日本研究機関の代表を含んで50人以下
- ▶ **主催国実行委員会**の運営: 韓国の主な研究機関
 - 開催場所と支援機関の確保
 - 参加機関への呼びかけ
- ▶ **実行事務局**や支援団体の運営
 - 関連機関の協力体制作り
 - Panelの企画とLogistical Support

協賛機関との相談、協議

- ▶ **日本国際交流基金**との協力
 - 準備委員会、基調講演、企画Panelの参加者の支援
 - 日本研究者の情報の提供
- ▶ **あつみ財団**との共催ないし協力も
 - 東アジアの日本研究者Networkの活用
 - 既存の経験の共有
- ▶ **韓国国際交流財団**など支援団体との協力
 - Seoul Japan Clubなどの応援のお願い

ご清聴ありがとうございました！